

日本薬学会 -輝かしい未来に向けて-
The Pharmaceutical Society of Japan -To Promising Future-

長野 哲雄

東京大学大学院薬学系研究科

Tetsuo NAGANO

Graduate School of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokyo

現在、日本薬学会には約2万人の会員がおり、学術団体として日本有数の規模である。日本薬学会は会員相互の親睦を図り、薬学の発展に寄与する事を目的にしているが、最近、この会員の興味の焦点が極めて多彩になってきている。会員構成は、大学教員が33%、学生会員が10%、企業関係者が32%、医療機関所属が13%、各種研究機関所属が5%、行政機関等その他の所属が7%となっており、有機化学、生物化学、分子生物学、物理化学、天然物化学、分析化学、製剤学、薬理学などの基礎研究から臨床に近い医療薬学あるいは製薬企業等の創薬研究、更にはレギュラトリーサイエンス、医薬情報学や医療経済学の領域にまで広がってきている。薬学教育あるいは薬剤師教育を専門にする人もいる。日本薬学会はこのような多種多様な領域に関心を持つ会員の要求に応える事により、日本における生命に関する科学の中心学会として発展することが期待されている。このためには、将来的に日本薬学会に現在ある11部会の活動をより強化し、各会員の研究上あるいは教育上の諸々の要望を部会で十分に議論し、それを学会全体に反映していくことになるであろう。

今年度は、平成18年度からスタートした新たな薬学教育制度の実質化が重要な課題である。日本の大学教育制度において前例のない4年制と6年制の並列の教育制度を内容あるものにして、是非とも成功させなければならない。

6年制教育においては、医師や看護師とともに医療の一翼を担う優秀な薬剤師を育てるとともに、日本だけでなく世界に発信できる高度薬剤師の養成が最終到達目標となるであろう。4年制教育においては、基礎研究である生命科学研究のアウトプットとして、必ず挙げられる「創薬」が重要な課題である。日本の薬学部あるいは薬学系大学院においては、欧米の先進諸国の薬学部とは異なり基礎研究を含めた薬学研究者を育ててきた。幾多の人材を製薬企業に送り日本発の新薬開発に貢献してきた。しかしながら、大学においては「創薬支援」的研究は活発であるが、「創薬」研究そのものは未だ十分とは言えない。総合科学技術会議の科学技術総合戦略において「医療」が重要項目に挙げられ、2025年までの長期戦略指針「イノベーション25」で明記されたように、国民の「創薬」に対する関心は極めて高い。今まさに本格的な「創薬」研究をスタートさせる時期にきている。

日本薬学会の輝かしい未来を切りひらくため会員が一丸となって努力することが重要である。平成20年度会頭として微力ながら、一意専心このために邁進したいと考えている。会員各位のご理解とご支援を切にお願いする次第である。